

読解テスト解答方式が 受験者のテスト得点に与える影響

—中国語母語話者の場合—

小林 久美子

1. はじめに

読解力向上のために日本語学習者や日本語教師は日々、様々な工夫をしており、それについての研究も数多く行われている。しかし学習者の読解力を評価する最も一般的な手段である読解テストは、日本語教育では考慮される機会が少ないと今までの経験から感じた。

一方、英語教育研究では様々な読解テスト研究がなされ、教育現場にも応用されている。

受験者の言語能力はできるだけ正確に測る必要があるため、テストを行う際にはテスト得点に影響を与える言語能力以外の要因は何であるかを特定し、それらをできるだけ排除する必要がある。

2. 先行研究と研究課題

2.1 先行研究

日本語教育以外の第二言語教育、特に英語教育を中心に先行研究では、テストの形式の違いがテスト得点に影響を与えるという研究結果が出されている。

Shohamy(1984)はイスラエルの英語(L2)学習者に対して、多肢選択式テストと自由解答式テストを実施し、両群のテスト得点に差が出るかについて検証している。その結果、解答方式が変わるとテスト得点に差が出ること、つまり多肢選択式は自由解答式より易しいことが分かった。Wolf(1993)はテスト解答方式(多肢選択式、自由解答式、クローズテスト)、テスト項目の言語、被験者の目標言語の経験の3つがテスト得点に与える影響を検証した。その結果、テスト解答方式、テスト項目の言語、被験者の目標言語の経験は全てテスト得点に影響を与えることが分かった。

2.2 研究課題

本研究では多肢選択式と自由解答式を比較した先行研究の結果(Shohamy(1984)とWolf(1993))を

より詳しく明らかにするという位置づけで、中心となる「テスト解答方式」のほかに「テストの問いの種類」「日本語読解能力」も要因に含めて研究を行った。研究課題は以下の通りである。

- 1 テスト解答方式(多肢選択式か自由解答式か)によってテスト得点は異なるか。
 - 1-1 両解答方式のテスト得点に差があるか。
 - 1-2 「テストの問いの種類」別で見た場合、両解答方式のテスト得点に差があるか。
- 2 日本語読解能力を上位群・中位群・下位群に分けた場合、テスト解答方式によってテスト得点は異なるか。
 - 2-1 両解答方式のテスト得点に差があるか。
 - 2-1 「テストの問いの種類」別で見た場合、両解答方式のテスト得点に差があるか。

3. 研究方法

3.1 被験者

被験者は中級から上級の中国語母語話者 64 名である。

3.2 プレテスト

プレテストは被験者を日本語読解能力別(上位群・中位群・下位群)に分けることを目的に、内容再生課題を筆記再生法で行った。その成績に基づき、表1のように被験者を各群に分けた。

3.3 本実験

本実験の読解テストには1999年日本語能力試験1級の読解問題「問題I」を選定した。この読解テストには7問の問いがついている。多肢選択式は能力試験問題をそのまま使用した。自由解答式は読解文はそのままだが、問1から問7についている4つの選択肢を消し、自由に解答できるスペースを作った。また問いの一部も自由解答式に合うように変更した(多肢選択式:「・・・」の例は次のどれか→自

表 1 本研究の各群の人数

	多肢選択式		自由解答式	
	グローバル	ローカル	グローバル	ローカル
上位群 (30%)	10 名		10 名	
中位群 (40%)	12 名		12 名	
下位群 (30%)	10 名		10 名	
計	32 名		32 名	

由解答式：「・・・」の例は何か。）

実験計画はテスト解答方式（多肢選択式・自由解答式）×日本語読解能力（上位・中位・下位）×テストの問いの種類（グローバルな問い・ローカルな問い）の3要因計画で、正答率を分散分析した。

3.4 グローバルな問いとローカルな問い

本研究での「テストの問いの種類」とは「グローバルな問い」と「ローカルな問い」の2種類である。それぞれの本研究での定義は以下の通り。

グローバルな問い：「隣接していても3つ以上の文、あるいは2つの文でも隣接していないものを理解しないと正解できないもの」

ローカルな問い：「問題文中の1つの文、あるいはそれ以下の単位（語など）を理解すれば正解できるもの」

3.5 自由解答式の採点

自由解答式の採点は、事前に日本語母語話者9名の自由解答を基に、「許容解答リスト」を作成した。このリストにはどんなタイプの解答が正解であるかが書かれている。この許容解答リストに基づき、自由解答式も中間点は与えず、正解か不正解かの判断をして得点化した。

4. 結果と考察

4.1 研究課題1の結果

研究課題1-1は分散分析でテスト解答方式の主効果が1%水準で有意であったため ($F(1,58)=8.92$)、多肢選択式は自由解答式より有意に得点が高いことが分かった。

研究課題1-2は1-1にテストの問いの種類

も加えて分析したものだが、その結果、解答方式とテストの問いの種類の間には交互作用が見られた。

そのため単純主効果を検定したところ、グローバルな問いでは多肢選択式は自由解答式より有意に得点が高くなったが ($t(62)=7.61, p<.01$)、ローカルな問いでは多肢選択式と自由解答式との間に有意な差は認められなかった(図1参照)。

4.2 研究課題1の考察

研究課題1-1で多肢選択式が自由解答式より高得点であった理由は、グローバルな問いでの多肢選択式と自由解答式との得点差であることが分かる。

グローバルな問いとローカルな問いとの間にこのような差が出た原因については、以下のように考察する。Shohamy(1984)でも多肢選択式と自由解答式との間に得点差が出たが、Shohamyはそれを考察するのに、多肢選択式と自由解答式の解答プロセスの違いに着目した。本研究でも同様に解答プロセスの違いが得点の差につながったと考えるが、その解答プロセスはShohamyより複雑であると推測する。Shohamyは多肢選択式は「理解と選択」ができれば解答できるのに対し、自由解答は「理解と産出」が必要であり、多肢選択式の「選択」に比べると自由解答式の「産出」の方が高度な技能なので自由解答式は多肢選択式より難易度が高い、と述べている。これは解答プロセスを2つの段階、つまり1つ目はテキストを理解する段階、2つ目は解答する段階に分けて考えたものである。以下、本研究でもこのプロセスに沿って考察を進めたい。

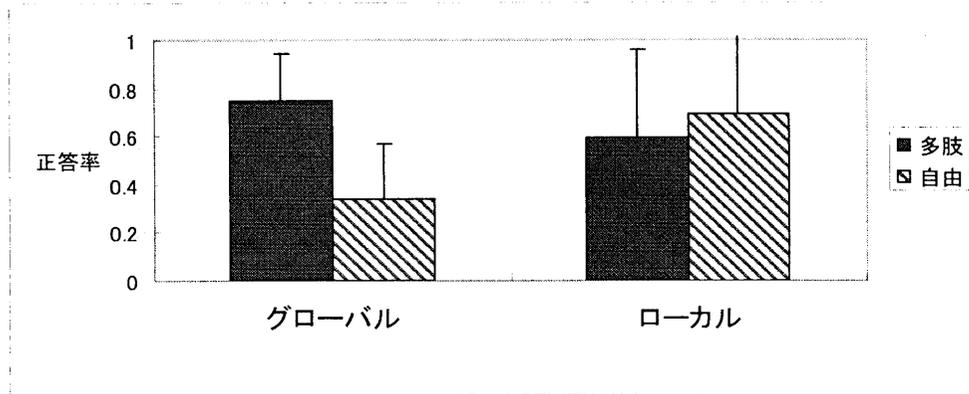


図1 両群の得点と標準偏差

まずグローバルな問いであるが、多肢選択式の場合は既に解答の手がかりが選択肢の中に存在しているため、受験者自身で最初から理解を始める必要はなく、選択肢の中にあるものを使って理解できる。さらに2つ目の段階でも多肢選択式は4つの内、1つを「選択」すればいいのであるから、難易度はそれほど高くないと考えられる。一方、自由解答式は選択肢という手がかりがないため、受験者自身で理解を一から始める必要がある。2つ目の段階でも、広い範囲に書かれていることをそのまま解答欄に書くことはできず、受験者は内容の「要約」や「換言」「統合」などを自分ですることが必要である。Shohamy は自由解答式は「理解と産出」が必要と述べているが、グローバルな問いに限っていうと、その「産出」とは要約や換言、統合が必要な比較的高度な技能になり、受験者の負担も大きいと考えられる。このように自由解答式では受験者に「手がかりなし」というものと、「要約・換言・統合」といった多肢選択式にはない2重の負担がかかるため、得点が低くなり、多肢選択式との差が出たのだと考える。

ローカルな問いは多肢選択式の解答手順はグローバルな問いとは理解すべきテキストの広さが異なるだけで、あとはほぼ同様のプロセスを経るであろう。しかし自由解答式では1つめの理解の段階はグローバルな問いとほぼ同様で選択肢という手がかりがないのだが、解答する段階になるとグローバルな問いの自由解答式とは大きく異なる。ローカルな問いは1つの文や語などを理解すればいい問いなので、自由解答式でもテキスト内で正解が書いてある箇所さえ見つけられれば、その箇所をそのまま解答の欄に

書いたとしても、つまりコピーするだけでも正解に結びつく可能性がある。以上の理由からローカルな問いでは自由解答式であってもそれほど難しくなく、多肢選択式との間に得点差が生じなかったのだと推測する。ただし、解答プロセスは理解と解答の2つの段階にはっきり分けられるものではないかもしれない。したがって今後、これらを裏付けるための解答プロセスの観察・分析が必要であると考える。

4.3 研究課題2の結果と考察

研究課題 2-1 については、テスト解答方式・日本語読解能力それぞれの主効果が認められたが、交互作用は認められなかった。この結果から、解答方式は上位群・中位群・下位群どの群でも多肢選択式は自由解答式より高得点であることが分かった。このような差が出た原因は、どのレベルにおいても自由解答式のグローバルな問いの得点の低さが原因だと考えられる。今回のテストは全7問中、比較的難易度の高いとされるグローバルな問いが5問あったため、自由解答式ではグローバルな問いの低い正答率が全体の得点を引き下げたのだと考える。

研究課題 2-2 については、テスト解答方式・日本語読解能力・問いの種類の間で交互作用が見られなかったが、グラフを書いてみるとグローバルな問いにおける上中下と、ローカルな問いにおける上中下のパターンが異なっていることがわかる(図2)。つまりグローバルな問いではどの群でも多肢選択式の方が高いが、ローカルな問いでは上中下で必ずしも同じパターンを示しているわけではない。この原因が何であるかは今回は分析しきれなかったため、今後さらなる詳しい検証が必要であると考える。

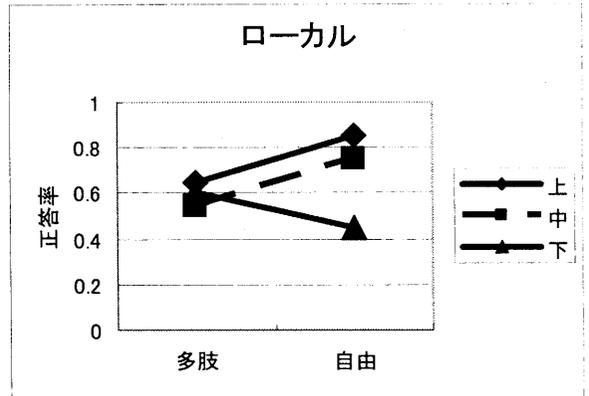
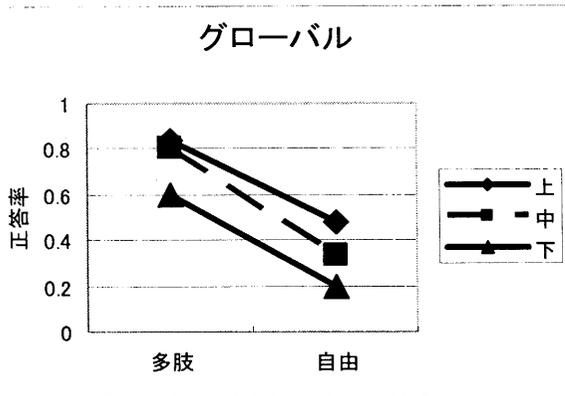


図2 日本語読解能力・問いの種類別の得点差

5. 結論と日本語教育への示唆

テストの問いの種類、つまりグローバルな問いかローカルな問いかを含めて考えると、解答方式が得点に与える影響は一律ではなく、問いの種類によって異なることが分かった。この結果は先行研究の Shohamy、Wolf の結果をより詳しく明らかにしたものであると考える。次に能力別で見ると、上中下どの郡においても解答方式の影響は一律であり、多肢選択式は自由解答式より易しいことが分かった。ただし日本語読解能力に加えテストの問いの種類別に多肢選択式と自由解答式を比べると、グローバル・ローカル両群での得点差の表れ方が異なる可能性が示された。

日本語教育への示唆としてはまず解答方式や問いの種類を変えることによってテストの難易度を変えることができると考えられる。また我々は往々にして一つのテスト結果から学習者に関するさまざまな決定をしがちであるが、本研究の結果から、テスト形式やテストの問いの種類がテスト得点に影響を与えることが分かったため、テスト得点から学習者に関する何らかの決定を行う際には、得点の解釈は慎重にすべきだということが示唆される。

参考文献

- Shohamy,E(1984) Does the testing method make a difference? The case of reading comprehension. *Language Testing* 1,147-170
- WolfD.F.(1993) A comparison of assesment tasks use to measure FL reading comprehension. *The modern language journal*,77,iv.473-489
- 国際交流基金・日本国際教育協会 (2000) 『平成 11 年度 日本語能力試験 1・2 級試験問題と正解』